

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：33921

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24600023

研究課題名(和文) 青少年向けメンタリング・プログラムの生涯発達への有効性に関する研究

研究課題名(英文) Study on effectiveness of youth mentoring program for life-long development

## 研究代表者

渡邊 かよ子 (Watanabe, Kayoko)

愛知淑徳大学・文学部・教授

研究者番号：90220871

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は青少年向けメンタリング・プログラムの生涯発達への有効性について、米国等の研究成果を分析し、日本の広島市青少年支援メンター制度がもたらす成果についてプログラム評価(報告書分析、アンケート調査、インタビュー調査)を実施した。

米国等においては青少年向けメンタリング・プログラムが国家政策として推進され、複数のハンドブックの出版と共に、メンタリングの理論とプログラムの実践を繋ぐ知見が蓄積されている。本研究は日本の広島市での10年間にわたる実践の成果を実証し、プログラムに参加したメンティが自らがメンターになって年少のメンティを支援する円環的生涯発達支援が実現していることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)： This study explored the effectiveness of youth mentoring program for life-long development and conducted a program evaluation concerning Hiroshima Youth Mentoring Program (content analysis of monthly report, quantitative survey and qualitative interview).

Youth mentoring program has been promoted as national policy in the U.S. and other countries. With publication of handbooks on youth mentoring program, the rich store of knowledge which combines theory and practice of mentoring program has been accumulated. This study verified the effectiveness of Hiroshima Youth Mentoring Program for life-long development through its program evaluation and proved its function as linking life-long development where former mentee becomes mentor for the next generation.

研究分野：教育学

キーワード：メンタリング メンター 青少年 生涯発達

## 1. 研究開始当初の背景

メンタリング・プログラムは、企業の人材開発や専門職養成、青少年問題への対応として脚光を浴び、LD 児教育から英才教育、総合的学習、不登校や就業対策に至るまで、個に対応した発達支援方策として活用されている。米国では 2002 年以來毎年 1 月を「全米メンタリング月間」とする大統領声明と連邦議会決議が出され、メンタリング・プログラムへ参加するボランティアの数は 2005 年には 300 万人となり 90 年代の 6 倍となっている。百年の伝統を持つ BBBS (Big Brothers Big Sisters) を中核とする米国のメンタリング運動は、市民ボランティアと専門家との協働による生涯発達支援施策として先進各国に拡大し、危険性をはらみつつも、自己効力感・自尊感情・出席率・成績等の向上、非行防止等の成果を上げつつあることが実証されている。近年、学力向上や退学防止を目指す学校型プログラムや、収監者子弟や障がい者の就労支援プログラム等、メンタリング運動は新たな展開を見せている。

日本においては非行少年の更生のための BBS (= BBBS) 運動が献身的に継続されるも、米国のような広範な青少年の発達支援のための市民運動に発展していない。2004 年に創始された広島市青少年支援メンター制度の成果が広く報道されるも、他地域でのプログラムの実施には至っていない。

米国等西欧各国の青少年向けメンタリング・プログラムの有効性に関しては、多数の成果研究とメタ分析も実施され、配慮に満ちた良きプログラムは、参加者に深い喜びと各種成果を上げていることが明らかとなっている。近年、メンタリングは教育関連諸学の辞書項目として新設され、その理論的実践的知見は、複数の膨大なハンドブックとなって総括される段階にまで進展しているが、非西洋諸国のメンタリング・プログラムの実践と有効性については殆ど知られていない。

## 2. 研究の目的

こうした世界のメンタリング運動とメンタリング研究の進展にあつて、筆者はメンタリング運動の実態調査 (米国・英国・オーストラリア・カナダ) を行うと共に、日本の各種継続的個別支援活動の特徴とメンタリング・プログラムの必要性、メンタリング・プログラムの効果に関する基礎理論を内外の学会で発表してきた。日本には支援を求めている青少年と彼らを援助したいと考えている多くの大人が存在し、メンタリングの重要性は体験的にも学術的にも明らかになっている。しかしながら両者を繋ぐ実践的なメン

タリング・プログラムに関する知見は青少年施策に活かされず、メンタリング運動も未成熟である。本研究は、青少年の発達支援施策として先進各国で展開されているメンタリング・プログラムの成果と基礎理論の普遍的妥当性の検証に向け、非西洋社会での先駆的実践事例である広島市青少年支援メンター制度が各参加者 (メンティ、メンター、保護者) にどのような成果をもたらし、それぞれの生涯発達にいかなる効果と意味を与えているのか分析した。

## 3. 研究の方法

青少年向けメンタリング・プログラムの成果と基礎理論の普遍妥当性の検証に向け、本研究は以下の三つのアプローチを採用した。

(1) 各国のメンタリング運動の政策動向とプログラム実践における異文化に関する配慮と知見の総括、ならびにそれらの非西洋文化の視点からの検討を行うため、書籍論文、インターネット資料の分析を実施した。

(2) 日本における各種継続的個別支援運動 (メンタリング運動) の歴史的展開と実態、なぜ日本においては B B B S 運動がメンタリング運動の中核となって普及しないのか、外国とは異なるその歴史的展開経緯について資料分析を行った。

(3) 日本の先駆的メンタリング・プログラムである広島市青少年支援メンター制度の成果、特に各参加者 (メンティ、メンター、保護者) の生涯発達にとっての有効性と意義について、定量的方法 (開始 3 年後に実施したメンティ・メンター・保護者 35 組へのアンケート調査の分析、開始 10 年後の同アンケート調査を 77 組に実施しと比較) と定性的方法 (初期 20 組の事例についてメンティ・メンター・保護者による報告書分析、メンター 16 人への半構造的面接調査) を用いて検証した。

## 4. 研究成果

(1) 各国のメンタリング運動の政策動向とプログラム実践における異文化に関する配慮と知見に関し、米国を中心にニュージーランド、ドイツについてメンタリング運動の現状と課題を分析した。

米国に関しては、2009 年まで連邦政府の補助金政策によって各種青少年向けメンタリング・プログラムは積極的に促進されてきたが、2009 年以降、メンタリング・プログラムの有効性を巡り補助金政策は大転換を迎え、メンタリング研究はメンタリングの成果をめぐる新たな段階に入ったことが判明している。どのようなプログラムが最も成果を上げるのかに関する実証と共に、プログラムの実践に関しては、特に同種の障がいを持つ役割モデルによるメンタリングを必要とする

障がいを持つ青少年、社会的養護（フォスターケア）の下で育つ青少年に向けたメンタリング・プログラムが展開されていることが判明した。これらのプログラムは青少年の自立と就労に向け、各参加者の事情と特性に応じた様々な配慮と工夫を重ねていることが明らかとなった。

さらにメンタリング・プログラムの実践における各ペアの交流継続に向けた配慮と工夫（関係性の発展段階の認識、メンターとメンティの組み合わせ、メンターのスキル訓練等）の成果の検証がなされ、実証された確かな実践智がプログラム実践に活かされていることが判明した。一方、米国のメンタリング運動の拡大に寄与したメディア戦略である「全米メンタリング月間」キャンペーンについて、その経緯と成果、人々がメンタリング運動に参加する動機を分析し、メンタリング運動への参加は、社会貢献への意図と共に、人々の社会や恩人に対する感謝と返礼が起点となっていることが明らかになった。

加えて、ドイツの高等教育機関におけるメンタリング・プログラムの現状と課題（特に女性研究者の継続的支援）の分析から役割モデルによる長期的継続的支援の重要性を再確認すると共に、他国のメンタリング研究の成果を学びつつ深刻な青少年問題に対応しているニュージーランドのメンタリング運動が、学校や地域において新たな試みを重ね、異文化への配慮と共に伝統的な米国等でのメンタリング・プログラムに革新をもたらしていることが判明した。

（2）日本における各種継続的個別支援運動（メンタリング運動）の歴史的展開と実態、課題の分析については、世界的なBBS運動における日本のBBS運動の特殊性、すなわち保護観察制度の一環として保護司制度と一体化され非行青少年に特化した制度として導入されたことあり、それがそのまま今日に至っていることが歴史資料から明らかになった。こうした歴史的経緯から日本のBBS運動が他国のように広範なメンタリング運動の中核にならないまま今日に至っていることが判明した。

（3）日本の先駆的メンタリング・プログラムである広島市青少年支援メンター制度は、メンタリング運動の展開を阻む日本の文化的歴史的諸課題を克服しつつ、2003年の試行以来、次世代育成に寄せる市民の善意によって発展を遂げてきた。2003年の5組から開始された同メンター制度は2015年度末にはメンター登録者が429人、同年度の交流総組数は179組に拡大している。以下、広島市青少年支援メンター制度が生涯発達にもたらす成果に関する研究成果である。

定量的方法（メンター制度開設後3年目に実施したアンケート調査）では、メンティ本人、メンター、保護者にとってのプログラムへの満足度（5点尺度の3.6~4.2）、メンタリングの関係性（5点尺度の4.0~4.5）、

メンティの変化（5点尺度の3.16~3.94）、交流継続意志のいずれにおいてもポジティブな評価となっている。

定量的方法（メンター制度開設後10年目に実施したアンケート調査）では、同一のアンケート調査を実施し、メンティ本人、メンター、保護者にとってのプログラムへの満足度、メンタリングの関係性、メンティの変化について尋ねたところ、これらのいずれにおいてもを上回るポジティブな評価となり、広島市青少年メンター制度がプログラムとして着実な成果を上げていることが実証された。

定性的方法では、試行期間を含む最初の2年間の20組の報告書に記されたメンタリングの交流活動記録とそれぞれの内省の分析を行った。20組の平均継続期間は22.1か月で、4か月から58か月の幅がある。内訳は6か月未満が1組、6~12か月が5組、13~23か月が9組、24か月以上が5組である。各組の交流にあって特に日本の特徴として浮上したのが、メンティの兄弟姉妹も交えて交流せざるを得ない場合が多く、メンターは特に細やかな配慮と高度なスキルが要求されることである。またメンターとメンティの関係性に、メンターと保護者との関係性が大きな影響を及ぼしていることも判明した。高齢者メンターの多くは健康問題を抱えつつ、メンティと交流し、時にそうした健康問題が両者の関係性を深め、メンティはメンターの病気や入院からも多くを学んでいる。長期交流組の場合、メンタリングの終結に向けて、メンター、メンティ、保護者が共にその終結の時期の見極めを試行錯誤し、交流終結を迎えるための準備をしている。メンターは時に自らが本当にメンティの成長に役立っているのかと自問しつつ、あくまでも謙虚に、メンティとその家族に寄り添いながらメンティに深い愛情を注いでいることが判明した。

定性的方法では、メンタリングの成果の源泉はどこにあるのか、なぜメンターはメンタリング・プログラムに参加しているのか、16人のメンター（男女各8人、20歳代4人、40歳代2人、60歳代6人、70歳代4人）に半構造的面接調査を実施した。メンターの活動動機となっているのは、社会貢献（今日の青少年が置かれている問題状況を何とかしたい、青少年の力になりたい）と、感謝と返礼（メンター自身がこれまで受けてきた支援や厚意へ恩返しをしたい）である。特にいじめや不登校、引きこもり、子育て等で困っていた際に温かく受容し励まし支えてくれた人（祖父母や両親、友人、メンター、学童の指導員等）への感謝が起点となり、これまで受けてきた支援や厚意に、今度は自分が報いたい、支援を必要としている青少年の力になりたいという強い願望が参加動機となっていることが判明した。

上記より、メンタリング・プログラムに参加するメンターの動機（社会貢献と感謝・返

礼)は世界共通であり、米国でメンタリング運動を牽引したメンタリング・プログラムの魅力(単純さ、直接性、社会的尊敬、合法性、関係の限定性、メンタリング概念の包括性と柔軟性)は日本においても同様に当てはまると思われる。メンタリング・プログラムが生涯発達に及ぼす効果とは、成長発達の過程において様々な援助や支援を受けてきた人々が、それらへの感謝の思いを新たに、プログラムへの参加を通じて自らの個性や専門性を活かした社会貢献を行う機会の提供にあり、誰もが経験している支援とそれへの感謝、無私の善意が世代を超えて還流していく希望の連鎖の仕組みにある。メンタリング運動が未成熟な非西洋の日本においても、生涯発達支援としてのメンタリング・プログラムは理論的にも実践的にも有効に機能しうることが本研究によって証明され、メンタリング・プログラムは日本においても重要な社会施策となりうると思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

渡辺かよ子、米国における異年齢ピア・メンタリング・プログラム(Cross-Age Peer Mentoring Program, CAMP)に関する考察、愛知淑徳大学論集 - 教育学研究科篇、査読無、6号、2016、71 - 81  
<http://hdl.handle.net/10638/5810>

渡辺かよ子、米国連邦政策と青少年向けメンタリング・プログラムの効果、日本生涯教育学会論集、査読有、36、2015、133 - 142

渡辺かよ子、青少年向けメンタリング・プログラムにおける交流継続に向けた効果的実践に関する考察、愛知淑徳大学論集 - 教育学研究科篇、査読無、5号、2015、71 - 80  
<http://hdl.handle.net/10638/5622>

渡辺かよ子、米国の社会的養護(フォスターケア)の下で育つ青少年向けメンタリング・プログラムの展開、愛知淑徳大学論集 - 教育学研究科篇、査読無、4号、2014、71 - 86  
<http://hdl.handle.net/10638/5433>

渡辺かよ子、ニュージーランドの青少年支援に向けたメンタリング運動に関する考察、愛知淑徳大学論集 - 文学部・文学研究科篇、査読無、39号、2014、47 - 60

<http://hdl.handle.net/10638/5457>

渡辺かよ子、ドイツの高等教育におけるメンタリング・プログラムの展開：フランクフルト大学を中心に、愛知淑徳大学論集 - 教育学研究科篇、査読無、3号、2013、23 - 29

<http://hdl.handle.net/10638/5260>

渡辺かよ子、「全米メンタリング月間」キャンペーンに関する考察、愛知淑徳大学論集 - 文学部・文学研究科篇、査読無、38号、2013、79 - 92

<http://hdl.handle.net/10638/5326>

渡辺かよ子、米国における障害をもつ青少年向けメンタリング・プログラムの展開、学び舎：教職課程研究(愛知淑徳大学) 査読無、8号、2013、48 - 59

<http://hdl.handle.net/10638/5285>

[学会発表](計9件)

渡辺かよ子、メンタリングとジェンダーに関する考察、日本生涯教育学会第36回大会(国立教育政策研究所社会教育実践研究センター・東京都台東区) 2015年11月7日

渡辺かよ子、メンタリング・プログラムが生涯発達に及ぼす効果に関する考察：広島市青少年支援メンター制度の成果を中心に、日本教育学会第74回大会(お茶の水女子大学・東京都文京区) 2015年8月30日

渡辺かよ子、米国連邦政策と青少年向けメンタリング・プログラムの効果、日本生涯教育学会第35回大会(国立教育政策研究所社会教育実践研究センター・東京都台東区) 2014年11月22日

Watanabe Naotaka, Watanabe Kayoko, Kaoru Nakajima, & Toru Sano, Multi-facet Triangular Evaluation of Youth Mentoring Program Implemented in Hiroshima, Japan, SCRA (Society for Community Research and Action) 2013 Biennial Conference (米国 University of Miami, School of Education & Human Development), 2013年6月27日

渡辺かよ子、ニュージーランドの青少年支援に向けたメンタリング運動に関する考察、日本生涯教育学会第33回大会(国立教育政策研究所社会教育実践研究センター・東京都台東区) 2012年11月10日

日

研究者番号：90220871

渡辺かよ子、「全米メンタリング月間」キャンペーンに関する考察、日本社会教育学会第 59 回大会（北海道教育大学釧路校・北海道釧路市）、2012 年 10 月 7 日

渡辺かよ子、日本における青少年向けメンタリング・プログラムの導入と成果：広島市青少年支援メンター制度の事例を中心に、日本教育学会第 71 回大会（名古屋大学・愛知県名古屋市）、2012 年 8 月 26 日

Watanabe Kayoko, Naotaka Watanabe, Kaoru Nakajima, & Toru Sano, Triangular Evaluation of Eclectic Mentoring Program: A Case of Hiroshima, Japan, 11th International Conference of Community Psychology, (Barcelona, Facultad de Psicología- Universidad de Barcelona, Spain), 2012 年 6 月 22 日

渡辺かよ子、ドイツの高等教育におけるメンタリング・プログラムの展開、日本高等教育学会第 15 回大会（東京大学・東京都文京区）、2012 年 6 月 2 日

〔図書〕(計 2 件)

*Psicología Comunitaria Internacional: Aproximaciones A Los Problemas Sociales Contemporaneos Vol. (International Community Psychology: Approaches to Contemporary Social Problems Vol. )* (分担執筆), 2012, Universidad Iberoamericana Puebla (Coordinadores: Irma Serrano-Garcia, David Prez-Jimenex, Josephine Resto-Olivo, and Maribel Figueroa-Rodriguez) 全 304 頁。

担当部分：Watanabe Kayoko, Naotaka Watanabe, Kaoru Nakajima, & Toru Sano, Metamorphosis of a Youth Mentoring Program in Japan: A Cultural and Historical Perspective, 291-303

『比較教育学事典』(項目執筆)2012 年、日本比較教育学会編、東信堂(全 424 頁)  
担当項目：渡辺かよ子「メンタリング運動」376

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

渡辺 かよ子 (WATANABE, Kayoko)  
愛知淑徳大学・文学部・教授